

二〇二五年度入学試験問題

国

語

(五〇分)

第二回 二月二日実施

〔注意〕 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。  
問題用紙も提出しなさい。

吉祥女子中学校

「七葉、だいじょうぶ、大したことないって。葉もいらなくらいだそうよ」

「ほんと？　じゃあ明日、学校行けるね」

七葉が明るい声を出す。それから母は紗英にも声をかける。

「紗英、つらかったね。風邪だって。大事にしてゆっくり休もうね」

紗英はしおらしくうなづく。

ね、と母が私を振り向いて笑い、小声で言い足す。

「これが逆だったら大変よ」

「なにが」

「七葉が大変ねって言ったら、七葉はほんとに寝込んでじゃう。紗英にだいじょうぶよって言ったら、もっと真剣しんけんに心配してほしくて寝込んでじゃう」

「私は」

「あなたにはほんとうのことを説明すれば納得なごしてくれるから、いちばん頼たのもしいわ」

頼もしい、と言われるのは、そんなにうれしくない。じゃあ、なんと声をかけてもらいたいだろう。だいじょうぶよ、と言われるれば、何がどうだいじょうぶなのかを知りたくなる。大変ね、と言われるれば、そうでもないよと強がりたくなる。事実を説明してもらうのが、たしかにいちばん安心できるかもしれない。

「あなたたち、いつでもそうよ。ゲームしてたって麻子は麻子、七葉は七葉、どこから攻せめるか作戦ひとつにも性格が出る。おやつを食べてたって麻子は麻子、七葉は七葉」

「さえは」

「ああ、紗英ももちろんちゃんと紗英よ、いつも紗英らしくて、おかあさんとっても楽しい」

そう言うて母は少し汗ばんだ紗英の頭を撫でた。

そうかな、と思う。そうだろうな、とも思う。私たちはやっぱり母から見ても似ていない。私たちが似ていない、というだけじゃない。たとえば七葉は誰にも似ていない。家族を考えても、親戚じゅうを見渡しても、私が知っている人たちを全員思い出したって、七葉みたいな子はいない。さて、ここで問題です、と私は言う。では、麻子みたいな子はいませんか。

「……いるだろうな」

数秒で答を出して、私は目を閉じる。② 照明のついた舞台からぼんと飛び降りる自分の姿が浮かぶ。

たしかに七葉と私は違っている。性格も考え方も違う。それなのに、気持ちや考えのほとんどを共有している。顔を見ればお互いの共振が手に取るようにわかるから、笑いあい、憤りあうことができる。どちらの考えがどちらのものだったか、やがてわからなくなってしまう。ふたりの間には言葉はいらぬ。お互いの間を流れる感情はつながっているのだから。

ただ、私たちのことを人に向けて表すときのために言葉が必要で、それを使うのはいつも七葉だった。七葉にとっても、私にとっても、どちらが表明してもいい私たちふたりの言葉。家族にはたぶん通じていたと思う。けどそれ以外の人には、七葉の言葉は七葉だけの表現として伝わり、それだから七葉は素直に自分の意見を伝えられる子、逆に私のほうはおとなしい子、地味で目立たない子、と映ることを私はちゃんと知っていた。でも、それで特に問題はなかった。

問題というなら、その元になる部分だろう。七葉がどうして思ったことを口に出せるのか、私はどうして躊躇するの。それははっきりしている。七葉が可愛いからだ。同じ親から生まれ、同じように育ったはずの私たちだから、思う。もしも自分に絶対の自信があったら、と。そうしたら、思ったことをそのまま言える。それで **A** をひそめられるなんて考えもせず、受け入れられるかどうか気にもせず。自信。それは努力して身につけるものでなく、天恵みたいに与えられるものだ。可愛さとまったく同じように。

注 \*共振………共鳴。

代替品で間に合うようなものじゃない。たとえば可愛さの代わりに勉強で一番になろうとか、スポーツに励もうとか、そんなふうには私の花を咲かそうだななんて思えない。うんと走るのが速かったら、物怖じせずになんでも言えるだろうか。ピアノが得意だったら、素直になれたらどうか。よちよち歩きころの頃から、気がつけばいつも隣となりに自分よりずっと可愛い子がいる。それで私は何をがんばらばいいんだらう。がんばることと可愛さは全然別のことなんだから。僻ひがんでいるわけじゃない。私になくても七葉にある。③  
でじゅうぶんなような気もするのだ。

私と七葉は滅多めったに喧嘩けんかをしない。喧嘩をするような種がない。そもそもふたりとも怒りおこっぽい性質ではない。難を言うなら七葉は少々頑固がんこなところがあるけれど、そして七葉から見れば私は少々意気地いきぢがないかもしれないけれど、そのせいで喧嘩になるわけじゃない。いつも一緒いっしょにいる私たちを見て、真由も未知花ちゃんも首を傾かじげる。仲がよすぎて気味が悪いみたい、などと言う。小学校から仲のよかった彼女たちと私は同じ地元の中学に進学した。今もいちばん親しい友達だ。でも親友と呼ぶほどではない。それは当然だろう。私には七葉がいる。

真由のところはお兄ちゃんと年がら年じゅう喧嘩けんかしているそうだ。顔見るのも嫌いやだよ、なんて言ってるくせに、ほんとのところはそうでもないんだと思う。だってよくお兄ちゃんのサッカーの試合を応援おうえんに行っている。

未知花ちゃんも弟としょっちゅう喧嘩になると言う。些細ささいなことで喧嘩が始まり、些細すぎて原因を忘れてしまうのだそう。だから五分後にはまたふたりでふざけて笑ってるんだよね、と言う。

うちは、そのどちらとも違う。喧嘩はほとんどしない。その代わり、原因はいつもはっきりしているし、一度喧嘩になったらどちらかが謝あやまらない限り終わらない。そうして、私が覚えている限り、七葉が謝ったことはない。最後に必ず私が謝ることになる。原因がいつも私にあるのかといえは、そういうわけでもない。七葉と喧嘩をしている時間は苦痛で、でも謝らなければ終わらないことはわかっていて、だから謝る。喧嘩を終わらせたいから、それだけだ。どうして謝るのかと訊きかれれば、そうとしか答えようがない。七葉のほうも、謝られればそれで気が済むらしく、その後はまだ拗すねたり文句を言ったりしたことはない。

私だって、喧嘩の最中は腹が立って、謝ることなど微塵も考えないし、むしろ今日こそ謝るもんかと思っている。だけど、最後はやっぱり誘惑に負ける。ごめんね、という言葉を口にする瞬間まで、喉元に意地が引つかかって脈を打っているのに、ご、と発音した瞬間、固まりが雪崩のように滑り落ち、代わりになんだか甘ったるい感じがこみ上げてくる。

ごめんね。七葉に何を謝っているのかわからない。ただ私は酔っている。このひとことで仲直りができると期待と、安堵と、素直にそれを口にするのできる自分のしおらしさみたいなもの。七葉も、私が謝れば素直にうなずくけれど、きつと首を縦に振った瞬間に甘く湧き上がるものに気づいているに違いない。私こそごめん、と言った瞬間に七葉の目に涙が膨れ上がる。喧嘩の間に泣いたことは一度だってないのに。私たちは、安手のクリスマスツリーの電飾みたいにぴかぴか光る感傷を満たす。そうして少しだけごちなく元通りを始める。

喧嘩して満たされるのは私たちで、それを厄介にするのが祖母だ。祖母は私たちが喧嘩をしているとき、いつのまにか近くまで来てじっと耳をそばだてている。そして、喧嘩の内容ではなく、どちらが声を荒げたか、手を上げないか、先に謝るのはどちらか、何食わぬ顔をして窺っている。④ 私たちはそれをどれほどどうつとうしいと思ったか。夢中で喧嘩をしても、祖母の気配に気づくとどちからともなく声をひそめた。それはもしかしたら祖母独特の喧嘩を諫めるやり方だったかもしれない。けれど、そういうときの喧嘩は不完全燃焼の種火が残ったまま、いつまでも **B** を引いた。ちゃんと最後までやらせて、と私たちは声に出さずに願った。⑤ 謝る瞬間の、あの甘く切ないドロップをちゃんと味わわせてほしかった。

一度だけ、最後までついに謝らなかつた。だから、決着のついていない喧嘩がある。もしかしたらあれが境目だったのかもしれない。違うかもしれない。七葉が店から離れた理由を私は何かと結びつけたがっている。

店にはいろんな品があった。壺や皿や椀、鉢、勾玉や仏像の類、それから、何に使うのかわからないような、すすけた木片や、割れた陶器の一片などもあった。これ、なんだろうね、なんだろうね、と言いいいながら私と七葉は小さな土器の欠片を、撫でたり、裏返したり、日に透かしたりした。そうしているうちに、その欠片が、身近な玩具みたいに親しみを帯びてきて、これをポケットに

忍ばせておければなあと考えたりもするのだ。持ち歩いてどうするわけでもない。ただ、親しいものを身につけているうれしさだとか安心感だとかに憧れただけだ。

生成の地肌に、ところどころかすれたような雲が染め付けられた陶器の欠片があった。それを見つけたときは、なんだかぼんやりとした欠片だな、としか思わなかった。でもどうしてだか私たちはふたりとも、割れたビスケットみたいなその欠片から目を離すことができなくなってしまった。これ、なんだろうね、うん、なんだろう、いつもと同じことを言いあいながら、お互いの視線が小さな陶片の上に注がれ、そこで拮抗きっこうしているのを感じていた。

先に手を伸ばしたのは七葉だ。思わず、といった感じで陶片の肌に触れ、それをそのまま掌てに包んだ。一、二、三、四、五。固唾かたづつをのんで、五、数えた。七葉は掌を開かなかった。

「なのちゃん、それ見せて」

押し殺した声で私は言った。七葉は動かなかった。

「見せてよ」

七葉が小さく首を振る。私は七葉の掌を開かせようと、腕をつかんだ。七葉は握りしめた掌をおへその辺りに抱えるようにして丸く屈かがんだ。その頑かたくなさにかつとなって私は七葉の背を押しした。身体がぐらつと揺れ、それでも七葉は顔を上げなかった。背中をつかんで揺さぶった。

「見せて、私にも見せて」

夢中になって七葉の身体を揺らしながら私は叫さけんだ。

階段の音にも気づかなかった。組みあっていて、はっと顔を上げたときには、祖母が怖おそろしい形相で立っていた。

「何をしているの」

私は大声で訴うったえた。

「なのちゃんが見せてくれないっ」

七葉は屈んだままだった。私は祖母に背を向け、七葉の肩かたをつかんでもう一度言った。

「それ見せてっば！」

すると祖母が言った。

「離れなさい、みつともない。店まで全部聞こえてきたよ」

「だって、七葉が」

「ほら、麻子も七葉も、離れて。七葉、手に持ってるものを出しなさい」

七葉は出さない。<sup>①</sup>頑がんとして首を振る。

「七葉のものなの？」

「違うよ、ここにあったものだよ」

私が言うと、祖母はため息をついた。

「何を取りあつてるのか知らないけど、ここにあるのは玩具じゃないんだよ、傷つけたら終わりだよ」

祖母は七葉の手をつかんで指を一本ずつこじ開け、中から陶片を取り出した。

「こんなもの取りあつてどうするの」

雲の絵の陶片を、眉まゆを上げて見る。少し手を遠ざけ、頭を後ろに引くようにして見る。そのとき、七葉が何か言った。くぐもつた、小さな声だったからよく聞き取れなかった。

「なんだって」

注 \*拮抗……力がほぼ等しく、互いに張り合うこと。

祖母が訊き返したときだ。七葉はきつぱりと顔を上げて、言った。

「返して」

祖母の顔色がみるみる変わった。眉が上がり、唇がきゅつと結ばれた。

「まだ文句があるんなら、家を出ていきなさい」

涙が膨れ上がり、それがこぼれ落ちる前に、七葉は走って階段を降りていった。

私は呆気にと取られていた。七葉は、返して、と言った。祖母はそれをただの反抗だと取ったみたいだけど、私にはわかる。あの子は、陶片をほんとうに返してほしいと思ったのだ。自分のものでもないのに、返せってどういうこと？

ひと目見て私もあの陶片に引きつけられた。だけど、返せとまでは言えない。所詮、お店のもの、父のものだから、せめてあれが売れなければいいなあ、ずっとこの家にあつていつでも好きなきときに眺められたらいいなあ、と願うくらいだ。

「麻子」

階段のほうを見ていた祖母が振り返り、落ち着いた声で言った。

「女の子の喧嘩はね、怒鳴ったり、叫んだりしたほうが負けです」

陶片のことを考えていた私は、祖母の言っていることが咄嗟に飲み込めない。

「下にいたら、麻子の大きな声だけが聞こえてきたよ」

「それって、私の負けってこと？」

祖母はうなずいた。

「どうして。七葉が取ったんだよ、最後は泣いて出ていっちゃったんだよ、なのに私の負けなの？」

「そういうものだから、覚えておきなさい」

どうして、と言いかけて、やめた。訊いても無駄だ。

悔くやしかった。普ふだん段だんだつたら泣ないていたかもしれない。でも、今はそれどころではない。七葉しちようの執しやく着ちやく心しんが私わたしを打うちのめめしていた。怒いか鳴なったから負まけ、叩たたいたから負まけなんじゃない。欲ほしいものをあれほど欲ほしいと思おもえる、七葉しちようの心こころに私わたしは負まけている。

(宮下奈都『スコーレN0.4』)

問一——線①「それなのに、と言って母はまた笑う」とありますが、母が笑うのはなぜですか。もっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 同じくらいの風邪であっても子どもたちの様子は三者三様で、異なる声かけが必要なのも興味深いから。
- 2 一緒に風邪を引いても子どもたちの症状は全く違い、異なる対処が必要になるのも面白いから。
- 3 風邪で寝込んでるときまで、子どもたちが違った形で自分に甘えてくるのが可愛らしいから。
- 4 同じように自分から生まれてきたのに、具合が悪いときの様子まで三人それぞれ違うのは不思議だから。

問二——線②「照明のついた舞台からぽんと飛び降りる自分の姿が浮かぶ」とありますが、「私」は自分をどのように考えていますか。五十字以上六十文字以内で説明しなさい。

問三 A・B にあてはまる人間や動物の体の一部を表す言葉をひらがなでそれぞれ答えなさい。

**問四** ——線③「それでじゅうぶんな気もするのだ」とありますが、「じゅうぶん」だと感じるのはなぜですか。もっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 七葉は友達よりも身近でかけがえのない存在なので、七葉が周囲からもてはやされるのは自分のこと以上にうれしく感じているから。

2 自分は七葉と違って意気地がないと自覚しているので、他人に意見を伝えることはできる限り七葉に任せておきたいと感じているから。

3 自分も実は意志が強いことを家族はわかっているのに、他人に地味で目立たない子だと思われたとしても構わないと感じているから。

4 七葉とはいつも一緒にいて一心同体のように感じているので、自分の代わりに七葉が持っているならそれで満足だと感じているから。

**問五** ——線④「私たちはそれをどれほどうっとうしいと思ったか」とありますが、「私たち」が「うっとうしい」と思うのはなぜですか。五十字以上六十字以内で説明しなさい。

**問六** ——線⑤「甘く切ないドロップ」の内容を具体的に表現している部分を——線⑤より前の文中から五十字以上六十字以内でぬき出し、初めと終わりの三字を書きなさい。

問七 〜〜〜線㉞「固唾をのんで」・㉟「頑として」・㊱「咄嗟に飲み込めない」とありますが、このときの気持ちとしてもっとも適当

なものを次の1〜4からそれぞれ一つ選び、番号で答えなさい。

㉞「固唾をのんで」

- 1 七葉の掌の中にある陶片を早く見たいとワクワクしながら
- 2 いつ七葉が陶片をはなすのか緊張してドキドキしながら
- 3 店の品に七葉が触れているので誰かに見つからないかヒヤヒヤしながら
- 4 なぜ七葉に先を越されてしまったのか訳がわからずイライラしながら

㉟「頑として」

- 1 意志が固く、祖母に対しても自分の気持ちを決して曲げずに
- 2 渡そうかどうかためらいながらも、力をふりしほって
- 3 祖母や「私」に対して、今さら素直になることができずに
- 4 いつもの平静さを完全に失ってしまい、あわてて

㊱「咄嗟に飲み込めない」

- 1 理不尽で反発したいが、うまく言い返せない
- 2 感情的に受け入れられず、納得することができない
- 3 すぐには頭に入ってこず、理解ができない
- 4 理解はできるが、なかなか気持ちを切り替えられない

問八 〓線X「決着のついていない喧嘩」とありますが、この喧嘩を通じて七葉に対する「私」の気持ちはどのように変化しまし

たか。もつとも適当なものを次の1〜4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 以前は七葉とは言葉に表さずとも気持ちのほとんどを共有していると感じていたが、決して引かない七葉の意志の強さを知り、自分との違いに空恐ろしさを感じるようになった。

2 以前は七葉との関係修復を最優先にして最後にはいつも七葉にゆずってきた「私」だったが、どうしてもゆずれないものがあることを知り、自分でもとまどっている。

3 以前は七葉とは感情がつながっているように感じていたが、陶片に対する七葉の強い執着心を目の当たりにして、七葉にはとっていかないと考えるようになった。

4 以前は自分の気持ちを七葉が代弁してくれるならそれでよいと考えていたが、怖い祖母にも反抗する七葉の強い態度に、自分も見習わなければと憧れの気持ちを抱いている。

問九 本文についての次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1) 登場人物についての説明としてもっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 母は明るく朗らかな性格で、三姉妹の性格の違いをよく把握して上手に育て分けているが、中でも七葉のことを特に可愛がっている。

2 「私」は母にしつかり者で頼もしいと思われるが、内心では七葉や紗英のようにもっと母にかまってほしいと思っている。

3 七葉はしつかり者の「私」を慕っており、二人は小さい頃からいつも一緒に喧嘩もしょっちゅうするが、すぐに仲直りする、まるで親友のような存在である。

4 三姉妹の祖母は、頑固なところがあり、「私たち」の気持ちに寄り添うのではなく、自分自身の考えを押しつけようとしている。

(2) 表現や内容についての説明としてもっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 くだけた話し言葉や身近なたとえを用いて「私」の心情を描写することで、七葉と対立する「私」への共感を読者に促すような効果が生まれている。

2 「私」の独り言のような心内表現が多用されており、七葉に比べて感情を口に出すことをためらいがちな「私」の性格が表されている。

3 「もしかしたらあれが境目だったのかもしれない」のように現在の視点から回想的に語られることで、「私」の後悔の念が強調されている。

4 冒頭では母の視点を通して三姉妹の様子が描かれ、後半では喧嘩のエピソードを通して「私」と七葉の悩みと成長が描かれている。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。字数指定のあるものは、句読点やかっこなどもすべて一字に数えます。

大学生の頃ころに京都の田舎いなかで、3畝せほどの小さな田んぼを借りて無農薬の稲いねづくりをしていた。数人の有志で、車で2時間ほどかけて時々田んぼに行つて、その近くにある小さな小屋で寝泊まりねどまりして農作業するというもので、田んぼは農家の人から無償むじょうで貸してもらっていたので、今考えるとずいぶんめづと恵まれた体験をさせてもらっていたものだ。そこに集う人々は、学生と、ちょっと怪しげなお兄さんと、ちょっと怪しげなおじさんなどがいたが、夜は酒を飲みながら他愛もない話をして過ごすが常だった。ある時、そのちょっと怪しげなお兄さんの一人が「人に迷惑めいわくをかけることなんて、何でもない」というようなことを言ったことに、僕はひっかかり「<sup>①</sup>なんで人に迷惑をかけていいんですか？」と、突っかかってしまった。そのお兄さんはちょっと困った顔をして、「いやいや、そういう話じゃないんだけど」みたいな、答えのような答えになっていないようなことを言ってお茶を濁しにご、話を流してしまった。もうずいぶん前の話だが、その時のことは何かずっと心に残っていた。

「人に迷惑をかける」ことと「人に迷惑をかけない」ことの、どっちが良いかと言えば、その答えは明らかかなように思える。そうではなくても僕たちは日本人だ。「人様に迷惑をかけないように」を念仏のように唱えて育てられてきた。「人に迷惑をかけることを何とも思わない」と言わんばかりの言葉に、当時の自分は少し憤りいきどおを感じたのだと思うが、<sup>③</sup>今はそのお兄さんが何を言いたかったのか、少しわかるような気がする。

<sup>④</sup>ブネラというアリマキ（アブラムシ）と共生している細菌さい菌がいる。アリマキは植物の害虫で師管液きゅうじゅう液を吸汁きゅうじゅうして生きている。師管液には光合成に由来する糖分が多く含まれているが、タンパク質のもととなるアミノ酸はほとんど含まれておらず、アリマキは常に糖分過多である。ブネラはそんなアリマキにアミノ酸を合成して与えあた、その代わりに過分にある糖をもらって生きている。ブネラとアリマキの共生は細胞内共生さいぼうないきせいという少し特殊な形態で行われており、アリマキは体内に菌細胞という特別な細胞を作り、ブネ

ラはほぼ一生をその菌細胞の中だけで過ごすことになる。彼らの共生の歴史は長く、共生生活を始めてからすでに2億年になると推定されている。2000年に日本人研究者によって、このブフネラのゲノム配列が決定されたが、その結果は驚くべきものだった。

ブフネラは私たちの腸内にいる大腸菌と近縁の細菌だが、大腸菌と比べると持っている遺伝子の数が約7分の1になっていた。これはアリマキの菌細胞内での長い共生生活の間に、アリマキ側から提供してもらえないものは、自分で作る必要もないよねと、どんどん遺伝子を捨てていった結果と考えられている。私たち人間も、たとえば結婚すると、それまで別々にもっていた洗濯機とかアイロンとか炊飯器とか、二つあっても仕方のないものがたくさん出てきて、人にあげたり捨てたりして処分することがあるが、それと同じようにブフネラは自分の遺伝子を次々と処分してしまい、気づけば2億年の間に遺伝子の数が7分の1になってしまったということらしい。

しかし、そんなブフネラは当然もうアリマキと離れては生きていけない。大腸菌なら人の体内から外に出て、たとえば川でも池の中でも生きていけるが、ブフネラはアリマキの体から取り出すと、自然界では生きていけないし、人工的にどんな栄養素を与えても培養すらできない。自分ひとりでは外敵と戦うことはおろか、自分の細胞膜さえ作れないのである。大学でそんなブフネラの話を紹介すると、ブフネラはもう生物じゃない、という意見が出てくる。ブフネラはアリマキの体外に出てひとりですべて生きていけない以上もうアリマキの一部であり、一人前の独立した生物として認めることはできないということだ。ブフネラの生態を考えれば、もっともな意見である。

しかし一方で、果たして「独立して」生きている生物など、本当にいるのだろうか？ とも思う。 **A** 人間はどうだろうか？

私たちの食べ物は、野菜であれ、肉であれ、他の生物に依存している。実はアリマキと同じで、人間はアミノ酸のいくつかを自分で充分な量作ることができず、他の生物から摂取しなければ生きていけない。人間は肉や魚といった食物からそれらを得ており、ブフネラのように特定の生物に依存しないと生きていけない訳ではもちろんない。

**B**

改めて考えてみれば、依存する生物が生き

ているか死んでいるか、あるいは特定なものか不特定多数かといったことに、何か本質的な違いがあるだろうか？ また、人間は呼吸によって酸素を得ているが、それは陸上の植物や海の藻類などが光合成をすることで生み出されたものだ。

C

食物にせよ、

それに含まれるアミノ酸にせよ、呼吸のための酸素にせよ、それらはすべて他の生物の存在に依存している。

そう私たちは、牛や豚やニワトリに、迷惑をかけながら生きている。それが私たちの本当の姿である。そしてそれは程度の差こそあれ、人間だけでなく現在の地球上に存在するすべての生物に共通する姿と言つてよい。たとえ他の生物を捕食することのない植物であっても、光合成に必要な二酸化炭素は、他の生物の呼気によって大気中に供給されている。また植物の多くは菌根菌という共生菌の存在がなければ、土から十分な養分を吸収することができない。決して、独立して生きていく訳ではないのだ。この世界は、すべてを完璧にこなし、他の生物の助けなど必要のない生き物たちが集まってできているのではなく、それ単独では生きていけない、不完全でいびつな生き物で溢れている。そして、それらがお互い補い合い、つながって全体の存在を可能にしている。それが「生命」の本当の姿である。

そして人間社会もその縮図である。周囲を見渡せば、植物のように基本的には多くのことを自分でこなす自立型の人もいれば、他人の助けがなければ生きていけないような従属型というか、寄生的な人たちもいる。そんな寄生的な人たちは一般的に言えば「迷惑」な存在だろうし、自分のことくらい自分でやって欲しいと思うのが人情である。しかし、この世からすべての「迷惑」がなくなれば、より良い世界になるかと言えは、必ずしもそうではないと、今は思う。

日本では「人様に迷惑をかけないように」と教えられて育つが、インドでは「お前は人に迷惑かけて生きているのだから、人のことも許してあげなさい」と教えられるそうだ。それは社会というものが、そういった双方向の「迷惑」を介してつながっていることを教えてくれている。何かより豊かな世界観ではないだろうか。

そうなのだ。もう側面に喜びがあれば、実は与える側にも喜びはある。親子関係などは、その最たる例だろう。その関係が強制や

過度に一方的なものでない限り、「迷惑」がまったくない世界より、より豊かで喜びに満ちた世界が「迷惑」により生まれてくる可能性はあるのだと思う。あの怪しげなお兄さんはそういうことを言いたかったのだろう。

完全な球体は、完璧で美しいものである。しかし、もしそこに欠点があるとしたら、それは完璧で何の助けも要らないこと、つまりそれ以上に良くなることが難しいことではないかと思ったりもする。人に迷惑をかけないようにと、いろんなことを予測、計算してすべてを完璧にこなすことは、何か世界を閉じてしまうようなことにつながっている。外からの風は、すきまがあるから吹いてくる。たとえば人の助けであったり、運のようなものであっても、すべてをコントロールして世界を閉じてしまつては、やってくる余地がない。

だから完全な球体だけの世界は、組み合わせもない。ただ多数の球体が存在しているだけである。いびつな形のものがたくさんあることで、それらを組み合わせた「新たな形」ができてくる。時にそれは一つのパーツからは想像もできないような複雑で美しいものとなる。世界を見渡せば、存外そんなことであるのだと思う。だから、この世界には不完全でいびつな生き物ばかりが揃っているのだ。⑧ 世界の謎が一つ解けた。なんかそんなふうには、思えてこないだろうか？

(中屋敷均『わからない世界と向き合うために』)

問一 —— 線① 「なんで人に迷惑をかけていいんですか」とありますが、このときの「僕」の気持ちとしてもっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 発言の真意を理解したいという興味。
- 2 常識に反するような発言に対するいらだち。
- 3 思ってもみなかった意見に対する混乱。
- 4 納得できない理屈に言い返そうという決意。

問二 —— 線② 「お茶を濁し」とはどのような意味ですか。もっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 いい加減にその場をごまかし
- 2 引け目を感じて遠慮し
- 3 相手の巧みな言葉にだまされ
- 4 弱みをつかれてあわて

問三 —— 線③ 「今はそのお兄さんが何を言いたかったのか、少しわかるような気もする」とありますが、「僕」は「そのお兄さん」が言いたかったであろうことをどのように考えていますか。それが示されているもっとも適当な一文を文中からぬき出し、初めの五字を書きなさい。

問四 ———線④「ブフネラというアリマキ（アブラムシ）と共生している細菌<sup>さいきん</sup>」とありますが、その「共生」の様子の説明として

もつとも適当なものを次の1〜4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 アリマキの体内にある菌細胞の中にブフネラは生息しており、アリマキは植物からはほとんど得ることのできないアミノ酸をブフネラからもらい、その代わりにブフネラに糖を与えている。
- 2 ブフネラの中にある菌細胞によって両者はつながっており、ブフネラが合成してつくったアミノ酸を与える代わりに、アリマキの体内に大量に存在する糖をもらってブフネラは生きている。
- 3 アリマキは光合成によって細胞内で作成した糖をブフネラに与え、その代わりにブフネラが体内で合成したアミノ酸をもらって生きており、そうした両者の共生の歴史は2億年にもほる。
- 4 体内に菌細胞という特別な細胞を作ることのできるアリマキだけがブフネラと細胞内共生をするが、両者はアリマキがアミノ酸を、ブフネラが糖を互いに与え合うことで共に生存している。

問五 ——線⑤「もっともな意見である」とありますが、このように言えるのはなぜですか。もっとも適当なものを次の1～4から

一つ選び、番号で答えなさい。

1 ブフネラは共生する生物の体外に取り出して培養したり観察したりすることができないため、大学生たちが生物ではないと勘違いしてしまうのも自然なことだから。

2 ブフネラは自分ひとりでは外敵と戦うことができず、自然界で生きていくこともできないので、他の生物と共生しなければならぬことは誰が見ても明らかだから。

3 大腸菌なら人の体外に出ても生きていけるが、ブフネラは自分ひとりでは細胞膜ひとつ作れないため、もはや生物とは言いがたいという意見が出るのは当然だから。

4 長く共生生活を続けてきたブフネラは、大腸菌と比べ約7分の1の遺伝子しか持っていないので、生物というより大腸菌と近縁の細菌の一種と見なした方がよいから。

問六 A B C にあてはまる言葉としてもっとも適当なものを次の1～5からそれぞれ一つ選び、番号で答えなさい。同じ

番号をくり返し使ってはいけません。

- 1 まして      2 つまり      3 たとえば      4 なぜなら      5 ただ

問七 ——線⑥「すべての生物に共通する姿」とはどのような姿ですか。三十字以上四十字以内で説明しなさい。

問八 —— 線⑦「社会というものが、そういった双方向の「迷惑」を介してつながっていることを教えてくれている」とあります

が、そのような社会のありさまを表現したことわざとしてもっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 人の振り見て我が振り直せ
- 2 袖振り合うも他生の縁
- 3 遠くの親戚より近くの他人
- 4 情けは人のためならず

問九 —— 線⑧「世界の謎が一つ解けた」とありますが、どのような謎に対してどのような答えが出たのですか。「迷惑」という言

葉を用いて、九十字以上百字以内で答えなさい。



次の1～6の——線のカタカナを漢字で書きなさい。

- 1 問題をホウチしてはいけない。
- 2 会社のシヨウヒヨウを新しくする。
- 3 台風はエンガン地域に大きな被害をもたらしだ。
- 4 彼はリコ的な人間だ。
- 5 相手の主張をロンパする。
- 6 荒地をタガヤす。

問題は以上です

二〇二五年度 入学試験解答用紙〔国語〕（五〇分）

第二回二月二日実施  
吉祥女子中学校

受験番号
氏名
得点

問一

問二

問三

A

B

問四

問五

問六

問七

ア

イ

ウ

問八

問九

(1)

(2)

問一

問二

問三

問四

問五

問六

A

B

C

問七

問八

問九

4	1
リ	ホ ウ チ
5	2
ロ ン パ	シ ヨ ウ ヒ ヨ ウ
6	3
タ ガ ヤ す	エ ン ガ ン

□

□

□

□

□

□

□

□

□

□